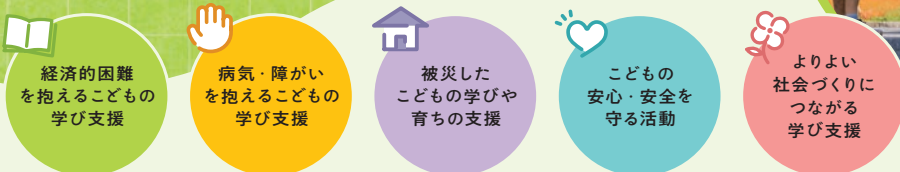


自主事業

自主事業は、ベネッセこども基金が企画・実施している事業です。こどもを支援するため、志を同じくする方々と共に5つのテーマに取り組みました。



経済的困難を抱えるこどもの学び支援

(Pick Up)

高校生がカナダのロールモデルと出会う ユース交流プログラムの支援

現状と課題

社会的養護のもとにあるこどもたちは、自分の気持ちや希望を伝える機会が少なく、自らがもつ権利や価値に気づきにくい

生活環境や状況などによって、体験や自己決定などの機会に格差生まれやすく、学びや成長の機会を逃してしまうことがあります。児童養護施設では18歳で退所しなければならぬところも多い一方で、進路選択についての情報が少ない、希望を伝えづらいといったことから、将来の描き方に悩むこどもも多くいます。

取り組み

カナダの若者と交流するプログラムを支援。
子どもの権利について理解を深め、
自分の声の価値を認識する機会に

児童養護施設のこどもを含む高校生8名が、カナダへ7日間の留学へ。自分の意見をはっきりと表明し、自己決定していくカナダの若者の姿を見て、自分の気持ちや考えを表明することが自分の将来を切り拓くことにつながるという気づきや行動のきっかけとなりました。

※特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、社会起業家白井智子氏、NPO法人チャイボラ、現地コーディネーター菊池幸工氏との協業で実現しました。

子どもの権利

すべてのこどもが主体としてもっている人権。生存・発達・保護・参加の権利がある。

子どもアドボカシー

こどもが意見や考えを表明できるようにサポートすること。

「子どもの権利」先進地域カナダ・トロントでの学びと交流

事前研修

国内にて子どもの権利や子どもアドボカシーについて事前学習。これから一緒に学ぶメンバーが集合し、チームビルディングを行いました。

カナダ・トロントへ

子どもアドボカシー活動がさかんカナダ・オンタリオ州・トロントへ。トロントの若者たちは、生活環境が何度も変わるといったつらい経験も言語化し、大人に意見を伝えていました。主体的に人生を歩む姿に刺激を受けるとともに、悩みや気持ちに共感し、心強く感じる場面も。



オンタリオ州の児童福祉や児童養護制度について話を聞き、意見交換



フードバンク施設でのボランティア活動にも参加



最終日は学びの集大成として自分の意見を大人に伝える「公聴会」を実施。これまで人に言えなかった気持ちを初めてオープンにできた人も多く、「金銭的な理由で将来の選択肢に悩む」「夢を叶える道筋を描くサポートを大人にしてほしい」など、力強い言葉が続きました。

事後研修

帰国後は振り返りとして「子どもの権利」を日常生活でどう実践するか話し合うワークを実施。「自分はどうか」「なぜそう思うか」など、意見や根拠を積極的に述べ、活発に議論しました。トロントでの経験が着実にこどもたちの力になっています。

帰国後の声

参加前は子どもアドボカシーのことを知らず、自分にできるか不安でしたが、現地での活動で自分の意見を話す力がつきました。帰国後、学校でも子どもアドボカシーについて調べるプロジェクトを始めました。大学に進学しても世界とのつながりを意識して学んでいきたいと考えています。

帰国後の声

帰国後、自分のいる児童養護施設で、施設の高校生の声をまとめて職員の人に伝えるという活動を始めました。



p.8の参加者体験談もぜひお読みください。



Check

くわしい実施レポートはこちらをご覧ください。





よりよい社会づくりにつながる学び支援

(Pick Up)

公教育での 「ダイバーシティ&インクルージョン教育」の推進

現状と課題

「社会にはさまざまな人がいる」ことを
体感する機会が少ない

日本の公教育では、病気・障がいがある人は別の場で教育を受けるという歴史があります。教育現場の人員不足や、「全員が同じことをする」という教育の形なども背景にあり、ダイバーシティ&インクルージョン教育はなかなか進まない現状があります。多様な人がいることを体感する機会が少なく、さまざまな違いを受け入れづらい社会をつくる原因の一つとなっています。



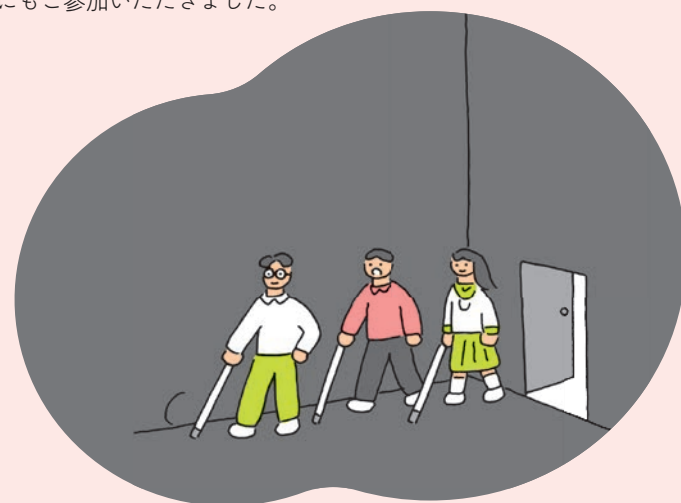
取り組み

視覚支援学校に、近隣の中学生在が訪問。
「視覚を使わない世界」の体験と、
生徒同士の交流を行う

大阪府教育庁との連携協定のもと、大阪府立大阪南視覚支援学校で以下を行いました。
大阪府教育長 水野達朗さんにもご参加いただきました。

- 近隣の中学校(和泉市立富秋中学校)の生徒が、視覚支援学校内で、「視覚のない世界」を体験(約60名)
- 大阪南視覚支援学校 教職員・保護者が「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」を体験(約50名)
- 大阪南視覚支援学校生徒と視覚障がい者スタッフの対話プログラム実施(約20名)

※本事業は、一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティと共に実施したものです。



Check

くわしい実施レポートはこちらをご覧ください。



視覚支援学校での「視覚のない世界」体験プログラム

プログラム内容

- 目を閉じた状態で道を歩く体験
- 暗闇での運動会(ダイアログ・イン・ザ・ダーク)
- 視覚支援学校の授業を体験(体育、理科、社会、国語など)



目を閉じた状態で、白杖(視覚障がい者が使用する白い杖)を使って点字ブロックの上を歩く体験



目を開けても何も見えない漆黒の暗闇での運動会体験



ゴールボール体験(目隠しをしながら鈴の入ったボールを転がしてゴールに入れることで得点とする球技)。視覚支援学校の生徒と一緒に競技

アンケートでも、多様性を前向きにとらえる生徒が増加

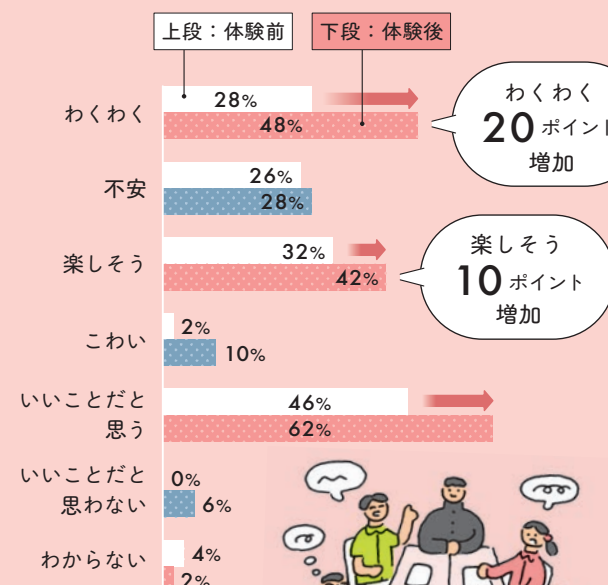
「自分たちとは文化や特徴が異なる人たちと触れ合うことをどう思うか?」という質問に対し、体験後は「わくわくする」「楽しそう」と答えた生徒の割合が増加。また、「障がいのある人について、どのように感じていますか?」という質問でも、体験後は「仲良くしたい」「親しみをを感じる」と答えた生徒が増加。多様性を前向きにとらえる生徒が増えました。

参加者の声

- 暗闇の中で相手の仕草や容姿をあまり気にせずにいられてとてもリラックスできました。心地よさを感じました。
- 視覚以外の感覚に集中できて、とても楽しい時間でした。
- 声を掛け合ったり、触れ合ったりすることで仲が深まりました。



Q 「自分たちとは文化や特徴が違う人たちと触れ合うことについて、あなたはどのように思いますか」



Q 「障がいのある人について、どのように感じていますか」

